

福崎町文化財探訪記(1)

福崎町教育委員会 出田直

はじめに

福崎町の歴史を見ていくと、1万2000年以上前の旧石器時代の石器が見つかり人の足跡が見え、それ以降も、縄文時代、弥生時代、古墳時代などそれぞれの時代について、当時の生活の様子を知ることが出来ます。それらの石器や土器などは神崎郡歴史民俗資料館で展示しており、そこに行くことによって歴史の一端に触れることが出来ます。

では、福崎の歴史に触れるためには資料館などに行かないとダメなのでしょうか。土器などはそこに行かないと見ることが出来ないかもしれませんが、それ以外でも見ることが出来るものがあります。今回は、ある日の文化財探訪記から福崎町の歴史の一端に触れてみましょう。

探訪記

○月○日 今日、朝から風もなく小春日和ののどかな日です。福崎町の歴史を散策するにはちょうどいい日になりました。市川の西側の古墳時代の歴史遺産を中心に散策してみましよう。

神谷^{ことだに}の大歳神社の北側の坂道をこもれ道を浴びながら歩いていくと、きれいに整備されたお寺につきました。本堂には『医王寺』と記されています。医王寺の本堂の左を進んでいくと、階段が作られていました。そこには薬師山古墳という看板が掲げられていました。確かに、ここは薬師山という名前が知られています。福崎の歴史を記している書物を見ると、「神谷古墳」となっていました。遺跡の名前を記すとき、その字名を用いることが多く、それからいけば、薬師山古墳も正しいかもしれ



ませんが、遺跡地図などには神谷古墳とあるので、その名前で今は覚えておきたいと思います。

看板を過ぎて少しいくと土の盛り上がりの中の真ん中に石で造られた横穴が見えてきました。横穴式石室というものを持つ古墳です。この古墳は、町内では数少ない方墳の可能性を持つ物として知られています。石室内は土が入り込み立ったままでは入れませんが、かがんで両膝を抱えた状態で入ることが出来ます。石室の玄室部分はやや広い空間になっており、子どもだと立つことが出来そうなくらい

いになっています。

石室を出て、古墳を一周した後、本堂の西にある小さなお堂のすぐ南に隣接する墓石のところに行きました。墓石の下の台石には古墳から出土したと考えられる石棺の蓋石^{ふた}がありました。小さいながらも凝灰岩^{ぎょうかいがん}で造られた家形石棺の蓋石です。神谷古墳から出土したものでしょうか。

高岡地区唯一の古墳を後にして、医王寺の西の道を北に向かって長野方面に進んでいきます。四つ角を右に曲がり坂道を進んでいくと池が目に入ります。池の北側には墓地があり、その墓地の東南角に墓石のような状態で一つの石が立っています。

長野の石棺として知られている古墳時代の棺おけの蓋石です。この石棺を持っていた古墳がどこにあったのかは今ではよくわかっていませんが、神谷古墳の可能性もあります。この石棺の身の部分は、今は福田墓地にあることが知られています。この石棺の身を訪ねるべく墓地から、道を東に長野の集落の中を進んでいきます。

墓地から坂を下り古くからある集落の中を東に行くと県道田口福田線に出ます。その道を少し南に進み四つ角を左に曲がると七種川の神谷橋を越えて福田の集落に入ります。集落を進むと道の北側に『固寧倉』と記された看板を見ると、江戸時代の飢饉の際の食糧備蓄倉庫だとわかりました。

その倉を後にして東に進むと、大歳神社の大きな石造鳥居があります。その鳥居をくぐり大歳神社に向かつて進むと用水路に当たります。用水路に沿って東側に進むと福田墓地に行き着きます。福田墓地の西隣には百歳の森が整備され、満100歳を迎えた方はこの森に記されます。百歳の森に石棺があるのではなく、福田墓地の元の斎場の祭壇として使われていたというので、一路水路に沿って斎場に行きました。用水路にかかっている橋を渡り、墓地に入るとその目の前には長野の墓地にあった物と同じような大きさの石がありました。

出来ませんでした。この石棺は古くから知られているもので大変貴重なものであることがわかりました。

ここから用水路に沿って東に山崎の集落に向かつて進むと、「大杉兵太郎の顕彰碑」の横に大きな家形石棺の蓋石を見つけました。この石も、古くから知られているもので、元はここではなく田の中に立っていました。かなり古くから田に立っていたと考えられ、この土地の字名が「立石」ということは知られるところではあります。今まで見た、石棺の中でも大きなものでこの石棺に見合う古墳を探すと、山崎大塚古墳が思い出されます。残念ながらこの石棺と大塚古墳との関係はわかりませんが、可能性の一つとして考えられるものではないでしょうか。

この石棺とかわかりが考えられる大塚古墳を訪ねるべく、播但線の踏切を渡り、大塚古墳を目指します。大塚古墳に行くまでに、古墳の北側の用水路のところ、農耕用の橋として利用されている石棺材の一部を見ることが出来ます。

石棺材を農耕用に利用したり石仏を刻んだりすることはこのあたりでもよくあります。長野の石棺にも「萬靈佛果」という文字が刻まれています。

大塚古墳北側の用水路の石棺材はよく見ると、溝が掘り込まれ石棺の底石ということがわかりました。これも大塚古墳とかわかりが指摘されています。

このような石棺を持つ古墳の主は誰だったのでしょうか。

大塚古墳をここから眺めると、古墳の上にはお堂と共に真っ赤な鳥居が目に入ります。そこに行く



と、石が崩れて石室の中が見えます。石室の崩れている部分はちょうど奥壁と呼ばれる部分で、横穴式石室の一番奥の部分に当たります。知らない人はここが入り口と勘違いするかもしれませんが、南側に回るとそこにも穴があいていました。羨道と呼ばれる通路に当たる部分の天井部分から入ることが出来ます。本来の入り口はこのすぐ南にありますが、埋まっているために判りません。この天井石は盗掘により開けられたものと考えられます。ここから中に入ってみると神谷古墳同様に石室内に土が流れ込み、ある程度埋まっていますが、ここは、大人でも比較的楽に入ることが出来ます。玄室内は大人でも立っていることが可能なほどです。この古墳の横穴式石室の長さは12.3mにもなり、比較的大きな横穴式石室として知られています。

古墳の石室から出て墳丘の上に立ってみると周辺に小さな穴があいているのがわかりました。その穴は狐の穴ということで、この古墳を別名「狐塚」といったのもう

なづけます。しかし、この周辺には、狐塚古墳という名前の古墳が知られており、混同を避けるためにも山崎大塚古墳の名称で覚えておきたいと思います。

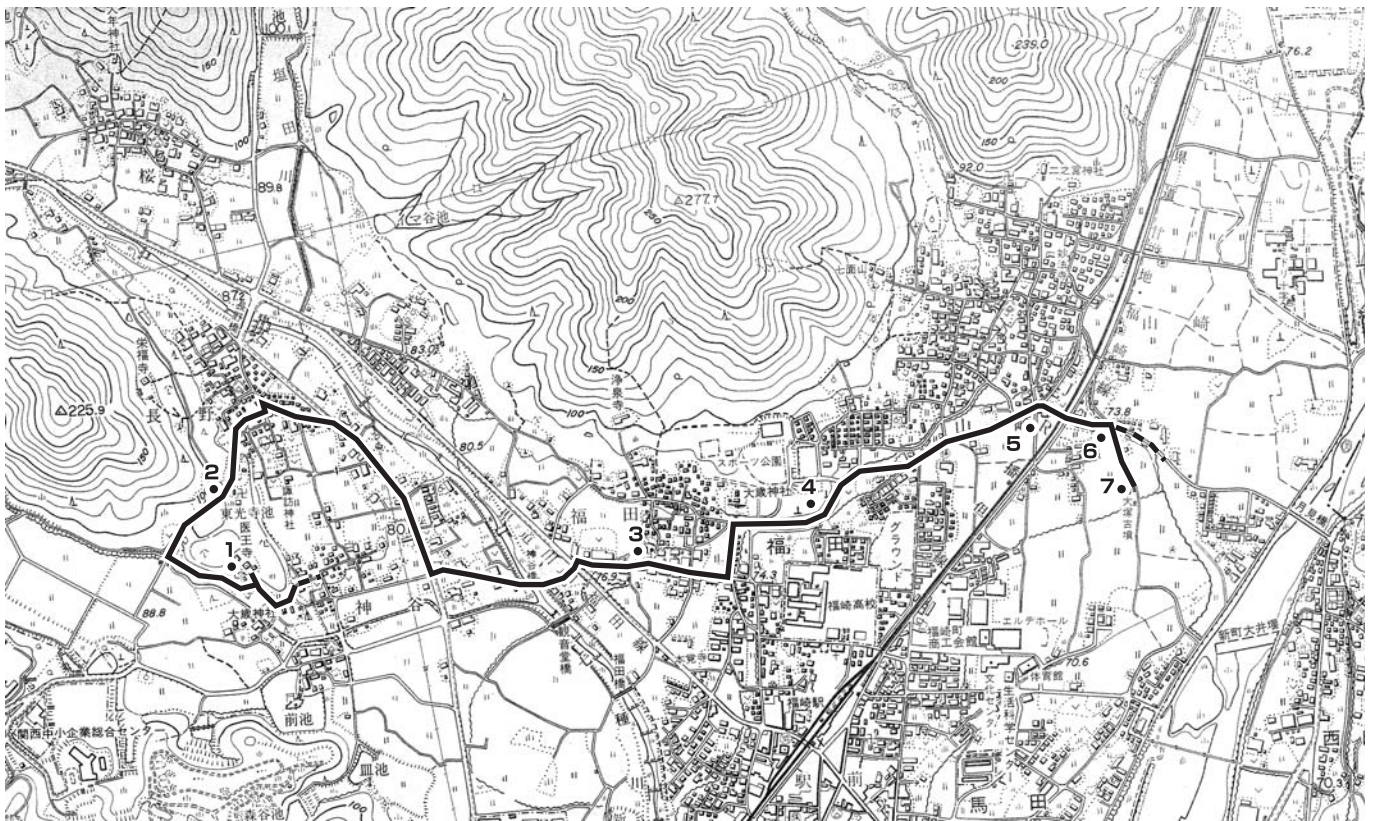
この古墳は、昭和47年1月12日に福崎町指定史跡になったということが設置されている説明板から知ることが出来ました。

この古墳は、町内の古墳と比較しても造られているところが、水田となっている平地部分で山ろくなどに多く造られている古墳とおもむきが少し違います。そのような古墳の被葬者を思い浮かべながら、古墳を後にしました。

ここから、北側に山崎二ノ宮神社の裏山を見ながら東にある市川に架かる月見橋へと進んでいきます。

二ノ宮神社の裏山は「神前山」といい神崎郡を開拓した神が鎮座した大岩があることで知られており、神崎郡名起源の場所と知られています。

今日の、歴史散策は夕暮れとなった時間で帰路につきました。次回も、機会があれば歴史散策を行いたいと思います。



探訪記主要箇所位置図

- 1 神谷古墳
- 2 長野の石棺
- 3 固寧倉
- 4 福田墓地の石棺
- 5 山崎立石の石棺
- 6 大塚古墳北の石棺
- 7 大塚古墳